

北前船の放つ交流の光

地域と文化をつなぐ海のロマン



佐渡で干石船をよみがえらせた
たい一。熱い思いで建造され
た「白山丸」＝新潟県佐渡市
小木町宿根木（撮影・加藤正文）



高田屋嘉兵衛画像（兵庫県立歴史博物館蔵）

江戸から明治にかけて北海道から大阪までの西廻り航路で活躍した「北前船」。ニシンや昆布などの北の産物、綿や塩など南の産物、寄港地の特産品を載せて各地に豊かな恵みをもたらすとともに、日本海から瀬戸内海に続くはるかな交流によって多彩な文化を花開かせた。

時を経てもこの「海の道」には往時の足跡がくっきり刻まれている。人口減などで地域衰退が進む中、交易がはぐくんだロマンをまちづくりにも生かそうとする動きも盛んだ。

司馬遼太郎の名作『菜の花の沖』の主人公である豪商・高田屋嘉兵衛（たかたや・かへえ、1766年～1827年）を生んだ兵庫・淡路島を起点に、新潟、山形、北海道を訪ね、北前船が現代に放つ魅力を掘り出してみよう。
（神戸新聞東京支社編集部長兼論説委員・加藤正文）



淡路島の春を彩る菜の花＝兵庫県淡路市（神戸新聞提供）

■淡路島・嘉兵衛の故郷

〈淡路の島山は、ちぬの海（大阪湾）をゆったりと塞ぐように横たわっている。北にむかうほど長く細く、逆に南へむかえば地がひろく、野がひろがり、水田が空の色を映している〉（司馬遼太郎『菜の花の沖』）

1769（明和6）年、今の兵庫県洲本市五色町都志に生まれた高田屋嘉兵衛は若き日、兵庫津（神戸市兵庫区）に出て豪商北風家支配下の水主・船頭として頭角を現し、函館に拠点を置く豪商への道を歩む。

43歳のころ、北海道の北東にある千島列島の調査に来たロシアの軍艦ディアナ号艦長ゴローニンを日本側の警備隊が拿捕する事件が発生する。怒ったロシア側は北海道沖にいた嘉兵衛の船を捕らえ、カムチャッカ半島に連行した。嘉兵衛はロシア人と信頼関係を築き、日本に帰ってゴローニンを解放する難交渉を成功させた。特にディアナ号の副艦長リコルドとはお互いだけ分かる言葉で話し、解決の糸口を探した。当時の硬直した武士には期待できないことをやってのけたその胆力と才覚に驚かされる。

■北前船と辰悦丸

北前船では港々で船頭自らの判断で商品を仕入れては別の港で販売する「買い積み」が特徴だった。当時、北海道などの生産地と大阪などの消費地との間で商品に大きな価格差があり、

船頭の才覚次第で巨額の利益を上げられた。ニシンや昆布、紅花などの北の産物が南へ運ばれ、綿や塩、鉄などといった南の産物が北へ運ばれた。

嘉兵衛の飛躍の礎になったのが「辰悦丸」である。自身が初めて建造した巨大船で1500石積みであった。

〈沖に出て、帆を八合に張った。風が真艦とすることもあって、辰悦丸はすばらしい速力が出た。ずつしりとした船体が、海を割るようにすすんでいくのである。嘉兵衛は、船首へ行った。和船の船首の尖りようがなんともいえずうつくしい、と嘉兵衛はおもっている〉（同）

伝説の辰悦丸は時を経て1985年、淡路島内で開催された一大イベント「くうみの祭典」の際に復元された。全長30メートル、帆柱の高さ20メートル。翌年、往時と同じルートをたどり、2500トンの航路で瀬戸内海や日本海沿岸の港を巡る41日間の航海を行った。嘉兵衛の故郷・都志にある「高田屋顕彰館・歴史文化資料館」では今年5月まで、「北前船宣言」展が開催中だ。辰悦丸の復元30年を記念した企画で、各港で大歓迎される様子を記録した写真、新聞記事、船頭のインタビュー記事などが並ぶ。

■佐渡の「シユク子ギ」

「荒海や佐渡によこたふ天の川」（芭蕉）。黒々とした鳥影、手前でうねる荒波、天空には冴え冴えとした天の川。この神秘的な光景に北前船の水夫たちも見入ったことだろう。



宿根木の夕暮れの海。往時の繁栄をしのぶ＝新潟県佐渡市



宿根木の町並み。板壁の民家の密集が特徴だ＝新潟県佐渡市



北前船の
主な寄港地
(特別展「北前船」展示資料図録)

佐渡島は総面積約8555平方キロ、東京23区や淡路島の約1.5倍だ。「離島」のイメージがしないのは、大きさに加え、金銀山の開発や北前船の交易を背景に多様な文化が息づいているからにほかならない。

380年以上続く旧家山本家を訪ねた。代々学問を好み、多くの文人が訪れた。尾崎紅葉、河東碧梧桐、会津八一、山岡荘八、柳田国男、折口信夫、井上靖、小林秀雄、司馬遼太郎…。島内に豊饒の文化が流れていることのあかしだろう。12代当主、山本修巳は先代の修之助(故人)が創刊した地域研究誌『佐渡郷土文化』を引き継ぐ。取材の際、「北前船なら小木、宿根木へ」とアドバイスを受けた。

小木地区は人口3千人弱。中央に城山という岬があり、東側は小木港、西側は小木漁港。かつて金銀の積み出し港、北前船の寄港地として栄えた。各地の屋号が現存する。兵庫では「淡路屋」「高砂屋」「但馬屋」などだ。

港近くに「海運資料館」がある。海水が入らないように精巧に作られた船筆筒や船絵馬などが展示されているが、注目は卵形の世界地図「新訂坤輿略全図」だ。すぐ近くの集落、宿根木出身の蘭学者・柴田収蔵(1820～1859)が作成した。パリやニューヨークと並んで「シユク子ギ」とある。いかにも希有壮大で面白い。

この小木が船の寄港地として栄えたのに対し、西端に近い宿根木は、鎌倉時代から船頭や船大工が全国から集い、北陸以北では最大の北前船の造船基地として発展した。迷路のような路地に入ると今も板張りの民家が軒を連ねる。格子窓、腰板、船のへさを思わせる三角形の



佐渡の歴史について話す山本修巳さん。地域文化の振興に力を注ぐ＝新潟県佐渡市

家。船大工の技が随所に刻まれている。もやいを巻く船つなぎ石や石鳥居は瀬戸内から、屋根は島根の石見瓦、他国の産物も溶け込んでいる。宿根木は「千石船の里」として町並みを残すため、景観保護条例の網を一带に掛け、1999年には約3億円を投じ、実物大の北前船「白山丸」を復元した。巻頭写真。全長24メートル、最大幅7.3メートル。その偉容に思わず声が出る。「佐渡国小木民俗博物館」に展示されている。2000年11月に放映されたNHKドラマ「菜の花の沖」のロケはここで行われた。高田屋嘉兵衛役は竹中直人、妻ふさは鶴田真由だった。

船の変遷

日本海を航行する買積船(北前船)として使われたタイプは弁財船と呼ばれる形式だった。もとは瀬戸内海で使われていたが、スピードが出ることから全国に普及。次第に大型化し、一千石を越す積載量を持つ「千石船」も登場した。北前船で使われた弁財船は積載量を増やすための肥満体、大きく反り上がった船首尾、荷物の転落防止・波除けの蛇腹垣、巨大な舵が特徴(北前船 新潟・兵庫連携企画展図録)から)

高田屋嘉兵衛の銅像の前であった顕彰・追悼式。「恩人」として人々の心に刻まれている＝北海道函館市(神戸新聞提供)



日本三大夜景の一つに数えられる函館の夜景＝北海道函館市

北前船の海の道を示す海運資料館の展示。モノを運び、文化が各地に広がった＝新潟県佐渡市



最上川の流れ。舟運でモノを運んだ＝山形県

■紅花の舟運

山形県の「母なる川」と言われる最上川。川下りをしていくとガイドが歌い出す。

♪ヨイサノマガシヨ

エンヤコラマカセ

酒田さ行くさげ

達者まめでろちやら

この最上川の舟運で山形と京大阪が北前船によって深く結びつき、商人たちが活躍した。そこで大きな富を生み出したのが特産の紅花だ。山形県では15世紀半ばから栽培が始まったとされ、江戸初期には質・量とも日本一の紅花産地として栄え、最盛期には全国の50～60%を山形産が占めた。最上川沿いの肥沃な土地が主産地。最上川の舟運から酒田湊を経由し、北前船で上方に送られた。

紅花商人たちは、山形から紅餅を京へ出荷し、京からの帰り荷として古着などの日用品を持ち帰り、各地に広く商った。行きて儲かり、帰りでも儲かるこのことでこの商売は「ノコギリ商売」と呼ばれたという。現在でも最上川流域の市町村には、紅花商人たちによって京から持ち帰られた江戸時代の雛人形がたくさん残存し、「山形雛のみち」や「庄内雛のみち」といわれるほど雛祭りが盛んに行われている。

山形の京言葉

紅花船の帰り荷として上方の紅染め衣装やひな人形が酒田から最上川をさかのぼってきた。あわせて多数の京言葉も入った。「アッチャコッチャ」「オバシデス」「テンコモリ」など関西弁が伝わっている。

■「箱館発展の恩人」

今回の北前船の旅の終わりは函館(当時は箱館)だ。函館山から見る夜景の素晴らしさ。神戸、長崎と並ぶ日本三大夜景に見とれる。この光の束に包まれた街には高田屋嘉兵衛の痕跡が

色濃く刻まれている。

函館山ろくには銅像が立つ。この前で2016年8月、嘉兵衛の顕彰・追悼式が6年ぶりにあった。地元関係者や嘉兵衛の出身地、淡路島の洲本市の住民ら約40人が出席した。

この北の町で嘉兵衛は「発展の恩人」と呼ばれる。当時、街の振興に力を注ぎ、湾内の埋め立て・掘削など港の整備、道路改修、造船所建設などに力を尽くした。「ハマグリやシジミの養殖、杉や松の移植など、巨大な富を地域復興に投じ、箱館の都市形成に大きな役割を果たした」(函館市公式観光情報)

市内にある「箱館高田屋嘉兵衛資料館」を訪ねた。海産物倉庫として使われていた建物を転用して1986年にできた。一角に辰悦丸の模様が飾られていた。小さなものだが、波濤を超えて北へ向かった淡路人たちの雄飛の気概が感じられた。(文中敬称略)

※参考・引用文献

- 司馬遼太郎『菜の花の沖』 1982年 文芸春秋
- 司馬遼太郎『街道をゆく 羽州街道・佐渡のみち』 1983年 朝日新聞社
- 司馬遼太郎『胡蝶の夢』 1997年 新潮社
- 復元辰悦丸回航記念誌刊行委員会『夢とロマンを満載して 北前船 日本海を帆走り太平洋を渡る』 1989年
- 加藤貞仁『北前船 寄港地と交易の物語』 2002年 無明舎出版
- 白山丸友の会『時代に帆を揚げて―白山丸復原の足跡―』 2004年
- 新潟日報連載『豊饒の島 佐渡』 2013年1～6月
- 「北前船」展実行委員会編『北前船 新潟・兵庫連携企画展図録』 2015年
- 海運資料館、佐渡国小木民俗博物館、紅花資料館、箱館高田屋嘉兵衛資料館の案内資料
- 神戸新聞北前船関連記事、インターネットサイトの情報